

観光経験がライフスタイル移住の 意思決定に与える影響

— 沖縄への移住者を対象とした M-GTA 分析に基づく — 考察

おはら みつはる
小原 満春 和歌山大学大学院

This study focuses on the process from the tourism experience of “lifestyle migrants” who voluntarily migrate to achieve their ideal lifestyle to immigration decision-making. Previous studies suggest that many lifestyle migrants have experienced local tourism prior to immigration, and that this experience has influenced immigration decision-making. However, few studies specifically demonstrate the processes by which the effects are impacted. To explore the influence of previous tourism experiences on the decision-making processes for migration, the authors of this study conducted a semi-structured interview of immigrants from Okinawa Prefecture. The Modified Grandet Theory Analysis (M-GTA) approach was used to analyze the results of the interviews. This method generated concepts from verbatim records of interviews and presented the relationship between concepts in the form of a diagram. The results of the analysis suggested that immigrants were impressed and satisfied by tourism experiences before migrating, and that this former encounter became a pull factor for relocation. Dissatisfaction with the existing daily life was a push factor for resettlement in another region. The researchers also found that the final decision to migrate exerted the greatest impact on job decisions, although multiple visits resulted in migration desires and perceived barriers.

キーワード：観光経験 ライフスタイル移住 移住プロセス M-GTA 分析

Keyword : Tourism experience Lifestyle migration Migration process M-GTA analysis

1. はじめに

近年、理想のライフスタイルを追い求めた自発的な移住が増えている（総務省、2018a）。こうした移住は、いわゆるIターンや農村移住などに代表されるような都市から地方への移動が多く、都市への人口一極集中による地域衰退を防ぎ、人口減少が著しい地域の経済規模を保つことをめざす中央政府や地方自治体に注目され、推奨されてきた（総務省、2018b）。このような理想のライフスタイルを求めた自発的な移住は、これまでの移住の中心である経済的な事情による非自発的な移住とは異なる形態の移住と言える。例えば、語学や習い事などの趣味を優先するための移住（島村麻里、2007）、沖縄の文化や風土などが本土から注目された沖縄ブームから、沖縄への移住（須藤直子、2010）、スローライフ生活へのあこがれから農山村への移住（小田切徳美・筒井一

伸、2016）などがあげられる。このように理想の生活を求めて自発的に移住する形態は、「ライフスタイル移住!」と総称され概念化されており、「経済的理由あるいは仕事や政治的な理由など伝統的に主流であった移住理由からではなく、より広範な意味での生活の質を重視して移住するもの」と定義されている（Benson, 2009）。長友淳（2013）は、これら移住者の多くは、中間層に属し移住に際しては経済的動機以外の要素が大きな役割を果たしているとし、ライフスタイル移住はこの二点を基軸にした概念だとしている。そして、これまでの研究によれば、ライフスタイル移住者はその多くが、移住前にその地への観光経験があり、その観光経験が移住意思決定に影響を与えているとしている（Cuba, 1991）。そこで、本研究では以下を目的とし、調査を行った。1つ目は、上で挙げた先行研究で指

摘された、観光経験による移住意思決定への影響についてのプロセスをモデル化することである。事例研究によって、そのプロセスは、移住者の語りにより報告されてはいるものの、プロセスをモデル化によって示した研究はないため、そのモデル化を目指す。2つめは、プロセスモデル化を行うに当たり、観光経験が移住意思決定に影響を与える要因を、具体的に明らかにすることである。その研究方法として、沖縄県へ観光経験があり、ライフスタイル移住を行った移住者へ聞き取り調査を行い、得られたデータについて M-GTA 分析を行った。その分析結果から、観光経験が移住意思決定に影響を与える要因について、概念生成を行い、その概念をさらにカテゴリーにまとめた。そして、その概念やカテゴリーの影響関係やプロセスについて検討し、観光経験からライフスタイル移住意思決定ま

でのプロセスモデル化を行った。

2. 観光経験がライフスタイル移住意思

決定に与える影響についての先行研究

欧米における初期のライフスタイル移住研究は、退職者移住の研究を中心に進められた。そのため、研究の対象者は主に退職後の中高齢者が対象で、それまでの観光経験をもとに退職後の生活の場所を決定するという傾向が明らかにされた(Cuba, 1991)。こうした研究では、観光から移住に至るプロセスにおいて、移住地選択に影響を与える動機や要因などが調査されている。例えば、Cuba (1991)は、退職後の移住先について、それまで居住していた場所と移住地との距離の関係に着目し、居住地との距離が近く観光経験があれば、他の移住地を探すことなく、その場所への移住を決定するとしている。また、観光経験によってその場所の魅力を知り、退職後に移住地として決定するとする場合、その魅力の要因として、気候やスローライフ(King, Warnes & Williams, 1998)、地域の持つイメージと気候(Rodriguez, 2001)、居住地への不満、移住先のライフスタイルの重要性(Truly, 2002)が上げられている。そして2000年代以降には、退職者移住に限定されない幅広いライフスタイル移住と観光の関係についての研究も行われるようになってきている。伊東宏修・前田和司(2003)は、北海道ニセコへのライフスタイル移住者の動機を聞き取り、プッシュ要因として都市での消費中心生活に対する批判精神と、アクティビティを可能にする自然環境がプル要因となっているとしている。このような、移住動機についての研究はなされてきたものの、その後Bowen & Schouten (2008)は、スペインのマヨルカ島へのライフスタイル移住者の多くが、移住前の観光経験によって満足しているという調査結果から、観光を通じてその場所に満足した経験が、移住意思決定に影響を与えると報告しており、その要因は観光地の品質と感動であるとしている。このような訪問先での

経験が、移住のプル要因になっていることについて、長友淳(2013)は、観光目的でオーストラリアに滞在した人々にとって、日本社会から逃れたいという欲求がプッシュ要因となり、オーストラリアの生活環境への憧れがプル要因となって移住を求める気持ちが増幅するとしている。この観光経験によって移住への気持ちが増幅するという点について、Johnston & Kawai (2011)は、移住者への調査から訪問前に移住を決めていることはなく、訪問後に移住の願望が形成されているとしている。そして、須藤直子(2013)は、その訪問が1度ではなく、何度も訪問することで、都市生活への批判精神と、移住への憧れが増幅し、移住するという指摘をしている。

これら先行研究に共通して現れる、移住意思決定までのプロセスにおける観光経験の影響は、次のようになっている。ある場所へ観光し、その場所の魅力を知り、帰着後、居住地での生活に対する不満が、移住のプッシュ要因となり、観光経験を通して得られた、その場所の魅力が、移住のプル要因となる。この移住のプッシュ要因とプル要因が相互に作用することで、移住を決断するというプロセスである。

3. これまでの研究における問題と研究目的

移住プロセスに関する先行研究については、そのほとんどが質的な方法を採用し、個別事例を列挙し、その要因について語りから明らかにしようとしている。この方法は、「なぜ移住したか」という問いに対して、要因を探索できる点では優れている。しかし、個別事例だけでは、移住者の意思決定に影響を与える要因や要因間の関係性について、容易に理解するのは困難である。すなわち、個別事例を用いつつ、ある程度モデル化する試みが必要であり、モデル化することで、その関係性について理解することが可能になる。しかしこれまで、観光経験から移住意思決定までをモデル化した国内外の研

究はほとんどない。そこで、本研究では観光経験があり、ライフスタイル移住を行った移住者へのインタビュー調査を通して、質的データの収集を行い、得られたデータについてM-GTA分析を行い、観光経験が移住意思決定に与える要因の探索および、観光経験から移住意思決定までのプロセスモデル化を試みることを目的とする。

4. 調査および分析

4-1 調査対象者と対象地の選定

本研究では国内の移住者を対象として、移住前に観光経験があり、移住は自発的で、仕事や経済的な理由以外で移住を行った移住者を調査対象者とした。その理由として、観光は、他地域に行き居住地に戻るという行動であるが、移住は、他地域に居住地を移すという行動である。その概念的区分は、地理的距離であったり、滞在時間であったりするが、欧米ではこの関係について、あいまいであるという指摘(Bell & Ward, 2000)や、逆にその概念的区分を明確に示した研究もある(Page & Hall, 1999)。しかし、日本国内では、観光経験が移住意思決定に繋がるといった、観光と移住のつながりに関する議論は、ほとんど行われてこなかったため、本稿では日本国内の移住を対象とした。また、沖縄に焦点を当てたのは、観光とのつながりを指摘した欧米におけるライフスタイル移住研究で、温暖なリゾート地を対象にした報告(Cuba, 1991; Rodriguez, 2001; Bowen & Schouten, 2008)がされていることによる。こうした既往の研究では、ライフスタイル移住者を誘引する要因として、ゆったりとした生活リズム、生活環境、温暖な気候が挙げられている。日本国内において沖縄は、日本最南端という温暖な環境であり、沖縄への移住希望者によって、スローライフができる、自然環境が豊かな中で生活できるなどの印象を持たれているという調査結果があり(沖縄振興開発金融公庫, 2017)、欧米の研究対象地と類似性がある。そのため欧米のライ

フスタイル移住に関する調査結果が日本においても適用できるのかどうかを確認する上でも、沖縄は研究対象地として最適であると判断した。

4-2 調査期間と対象者および方法

2018年4月～5月にかけて、スノーボールサンプリングに基づき、沖縄県外からの日本人移住者13名に面接調査を実施した(表-1)。質問は半構造化形式で、観光による訪問から移住までの経緯について尋ね、回答を録音し、後日文章化し、データとして用いた。なお一人当たりのインタビュー時間は平均で58分であった。

表-1 調査対象者

No	性別	移住時年齢	出身地	居住地	居住年数	移住前訪問回数	職業
A	男性	28	東北	中部	3	4	会社員
B	男性	23	関西	南部	4	3	会社員
C	男性	39	中部	北部	5	10以上	団体職員
D	女性	35	九州	北部	11	3	団体職員
E	男性	39	関東	南部	6	1	会社員
F	女性	28	東北	南部	12	20以上	会社員
G	男性	20	九州	南部	2	1	会社員
H	男性	37	関東	離島	5	10以上	会社員
I	女性	48	関東	南部	4	6	自営業
J	男性	32	関東	中部	13	20以上	団体職員
K	男性	26	関東	南部	7	1	自営業
L	女性	34	関東	中部	14	1	アルバイト
M	女性	28	北陸	離島	15	4	アルバイト

表-2 M-GTA 分析におけるカテゴリー・概念・定義

カテゴリー	概念	定義
Ca1. 観光による 認知	Co1. 非日常の認知	観光による訪問で、非日常を認知する。
	Co2. 自然環境の認知	観光による訪問で、沖縄の自然環境を認知する。
	Co3. 都会的環境の認知	観光による訪問で、沖縄が事前のイメージとは違い都会的な発展を遂げていると認知する。
	Co4. 余暇活動に最適な環境の認知	観光による訪問で、沖縄が自らの余暇活動に適している場所として認知する。
Ca2. 観光による 体験	Co5. 住民との交流	沖縄の住民と交流する。
	Co6. 観光業者との交流	沖縄の観光業者と交流する。
	Co7. 余暇活動の体験	沖縄で余暇活動を体験する。
Ca3. 肯定的経験 評価	Co8. 非日常体験の感動	観光による訪問での非日常体験に感動する。
	Co9. 自然環境への感動	観光による訪問で、沖縄の自然環境に感動する。
	Co10. 都会的環境への感動	観光による訪問で、沖縄が事前のイメージとは違い都会的な発展を遂げていると感心する。
	Co11. 余暇活動に最適な環境への感動	観光による訪問で、沖縄が自らの余暇活動に適している場所として感動する。
	Co12. 住民との交流による満足	沖縄の住民と交流することにより満足する。
	Co13. 観光業者との交流による満足	沖縄の観光業者との交流に満足する。
	Co14. 余暇活動の体験による満足	沖縄で余暇活動を体験することにより満足する。
Ca4. 日常生活の 不満	Co15. 仕事の不満	居住地での仕事上の不満や問題。
	Co16. 生活の不満	居住地での生活上の不満や問題。
	Co17. ライフスタイルに対する不満	現状の生き方そのものに疑問を持ち、自分の理想のライフスタイルとは違うと感じる不満。
Ca5. 移住意図	Co18. 移住したい気持ち	観光による訪問で、移住を具体的に意識し始めること。
	Co19. 移住先候補の比較	沖縄へ移住を決める前に、他の移住先の候補と比較検討を行う。
Ca6. 移住阻害要 因	Co20. 家族の反対	家族による移住の反対。
	Co21. 仕事・収入の不安	移住後の就職先があるか、希望の収入が得られるか、収入はあるかの不安。
Ca7. 移住の決断	Co22. 人間関係の不安	移住後の就職先や、近所づきあいの人間関係の不安。
	Co23. 就職先の決定	移住先での仕事が決まること。
	Co24. 受入先の決定	移住先での受入先が決まること。

4-3 分析方法

データの分析では、M-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）を採用した。M-GTAとは、データに密着した分析から独自の理論生成を可能とする質的研究法であり、研究対象となる現象が、プロセス的性格を持っているものに対して適用される(木下康仁, 1999)。本研究では、移住者の移住までのライフヒストリーにおいて観光経験による移住意思決定の影響要因を探索し、影響要因と意思決定との関連性を明らかにするという点でプロセス性を有しているため、適した分析方法であると考えた。M-GTA

は、調査と分析を同時進行で行い、概念生成も同時に行う。しかし、調査件数を増やしても、新しい概念が生成されなくなると、理論飽和が起こったと判断し、調査を終了する。本調査においては、12名で理論飽和が確認された。そこで、追加で1名を調査したところ、新しい概念が生成されなくなったため、調査と分析を終了した。

4-4 調査および分析結果

インタビュー調査により得たデータに基づいて、概念の生成およびカテゴリー化を行った結果、7つのカテゴリーと24の概念が生成された(表-2)。

以下では、表-1を用いて、カテゴリー別に観光経験から移住意思決定までのプロセスについて順に記述していく。なお、分析結果については、カテゴリーをCaとし【 】で示し、概念をCoとし〔 〕で示す。

Ca1. 【観光による認知】

移住者が最初に、沖縄へ観光者として訪問した理由は、友人の訪問、社員旅行、一人旅、友人との旅行、恋人との旅行、

ダイビング、魚釣りであった。理由は多様だが、初訪問時の【観光による認知】は4つの概念にまとめられた。

まず、沖縄に対しての雰囲気について「もう本当になんですかね、もう非日常ですかねほんとうに。(F)」、「国内もあちこち行っていたんですけど、ちょっと雰囲気が違うというか、独特の日本なんだけどちょっとやっぱり違う雰囲気。(D)」といった[Co1. 非日常の認知]や、「なんて美しいだろう、別の国みたい、別の世界が。こんな世界が知らなかったんだなーって思いましたね。海の色と太陽の光と植物。(I)」といった[Co2. 自然環境の認知]、「本土の地方都市よりも発展しているし、割と外国人の人も多くて、グローバルな感じで、国際的で意外と悪くないなみたいな。(E)」というような[Co3. 都会的な環境の認知]といった、沖縄の雰囲気、自然、街並みについて認知している。また、ダイビングという目的を持って訪問した場合には、「沖縄に通うようになったきっかけの一つですね。ダイビングするようになって離島に行き始めたんですね。目的はダイビングです。(H)」といった、沖縄へはダイビング目的で訪問し、沖縄の海の環境がダイビングに適しているということから、レポート訪問を行うようになったという[Co4. 余暇活動に最適な環境の認知]も確認された。

Ca2. 【観光による体験】

観光による訪問によって、沖縄がどのような場所か認知をするが、同時に【観光による体験】も行っており、体験は3つの概念にまとめられた。

まず[Co5. 住民との交流]については、「最初は海が目的で訪問していたのですが、後々には、沖縄の人たちの人間味とでもいいますか、結構地元の人たちと触れ合うことが多くて。そんな方々に会いたくて来ていた部分もありますね。(F)」、「ゲストハウスで働いてたりする人もそうですけど、そこに来ているお客さんですか、その近くに住んでいる方

とも交流があって、夜になると、このなんかどこからともなく人が集まってきた、なんかこう飲み会が始まったりして、結構人との触れ合いがその濃いつて言うか、その出会いですね。(D)」といったように、沖縄への訪問目的が住民との交流に変化し、その触れ合いを求めている。また、必ずしも住民とは限らずに「初めて現地の方とお会いしたダイビングのガイドさんがとても親切にさせていただいて、やっぱり印象がよかったので、2回目に行くきっかけになりました。(D)」というように[Co6. 観光業者との交流]、すなわち観光者と従業員においても人間関係を構築している。また、ダイビングなどの明確な目的を持っている場合は、[Co7. 余暇活動の体験]をしている。以上のように、観光による訪問によって住民や観光業者との交流による人間関係の構築や、余暇活動を体験していた。

Ca3. 【肯定的経験評価】

観光による訪問を通して、沖縄の自然環境の認知や、住民との交流など、これら観光経験について、肯定的な評価をしている。「やっぱりなんて美しいところなんだろう、別の国みたい、別の世界が。こんな世界が知らなかったんだなーって思いましたね。(D)」などの[Co8. 非日常体験の感動]、「海でも泳げましたし、海が綺麗ななと思ったし。とにかくポジティブな印象でしたね。(H)」[Co9. 自然環境への感動]、「思ったのは、すごい、まあ最初那覇着いた時に、那覇はだいぶ都会だったのにびっくりしましたね。思ったより、沖縄ってね、どうしてもこう、石垣の壁とか、ああいう古民家のイメージなんですけども、普通にビルに立ってて、まーほんどの地方の小さな県庁所在地より、全然発展してるんですよ。(E)」[Co10. 都会的環境への感動]、「とにかくダイビングする場所としては最高ですよ。(A)」[Co11. 余暇活動に最適な環境への感動]、「その村の地元の人と交流もできてね。なんかキリバスみたいだなーって感じはありましたね。

(F)」[Co12. 住民との交流による満足]、「ゲストハウスの、その出入りされてたり、働いてたりする人もそうですけど、そこに来ているお客さんですか、その近くにその住んでいる方も、そのゲストハウス自体とも交流があって、結構その人との触れ合いがその濃いつて言うか出会いをきっかけに訪問するようになりましたね。(D)」[Co12. 観光業者との交流による満足]。「八重山諸島っていうのがあるのが分かって、で結構色々八重山諸島を行ってみましたね。それから〇〇島行ったり、あと〇〇島で行っているうちに行き着いたのが〇〇島なんですね。ダイビング目的です。(H)」[Co14. 余暇活動に最適な環境への満足]など、これら肯定的な評価が、後に沖縄へのレポート訪問につながっている。

Ca4. 【日常生活の不満】

リピーターとして、沖縄へ訪問するものの、日常生活に戻ると、「仕事が激務で、いわゆるブラック企業なんです。もう朝7時から夜10時まで毎日勤務で。もうこんな生活から抜け出したいと考えていました。(A)」などの[Co15. 仕事の不満]や、「住んでいたアパートがもう古かったんで、その立ち退きになって、引越さなきゃいけないって。(D)」[Co16. 生活の不満]、「なんかそのサラリーマンになった時って、お金をいっぱい稼いで、車買って、ゆくゆくは家を買って、みたいにいね。日本人はそういう価値観ですよ。なんか別にそういうことしなくて、全然お金とか、お金とかじゃなくて、人は幸せになれるんだなーって。(H)」といった[Co17. ライフスタイルに対する不満]など、移住者は、移住前の生活において、なんらかの不満を抱えているという背景があった。

Ca5. 【移住意図】

沖縄へ肯定的な評価を行い、日常生活ではなんらかの不満を抱えている状態で、沖縄へレポート訪問を繰り返すことで、徐々に移住したい気持ちが形成され

る。「年に2回か3回かは来ていて、徐々に住んじゃった方がいいんじゃないかと思いはじめようになりました。(F)」や、「まあ最初旅行で〇〇島に行って、また沖縄行ってた時点で移住したいなーっていう漠然としたね、沖縄に行く人誰しもが思ってると思うんですけど、漠然としたね移住願望っていうのあったんですけどね。(H)」といった、[Co18. 移住したい気持ち]が芽生えていることがわかる。そして、移住を意識すると、他にも移住に適した場所があるのではないかと考えてを巡らせる。「その時私はやっぱり海が好きだったので、あのグアムが好きで何回かグアムにも旅行も何回か行って、そのグアムもう1回行きたいなと思ってたんで。(D)」、「最初は四国と九州も実はちょっと考えていたんですね。九州は花粉が多く、うちの主人がめちゃくちゃ花粉症なんです。それは多分生きていけないだろうなーっていう話になって。(I)」といったように、沖縄へ肯定的な評価をし、レポート訪問を行ったとしても、[Co19. 他地域との比較]といったように、いくつかの移住候補地を考えるようになる。この移住先候補比較の段階で、過去の観光経験が影響を与えている。例えば、都会的な環境について認知し感動したFさんは、沖縄に決定した理由として「那覇だと割と都会なんで安定した収入が得られるかと思って」としており、ダイビング目的のAさんは「沖縄

は南の島だけど、ハワイと違って、国内で治安がいいし、生活スタイルも変えずにできる。」などを理由としている。これらのことから、観光による経験が、移住意思決定および、移住先候補の比較の際に、影響を与えていることが推察される。

Ca6. 【移住阻害要因】

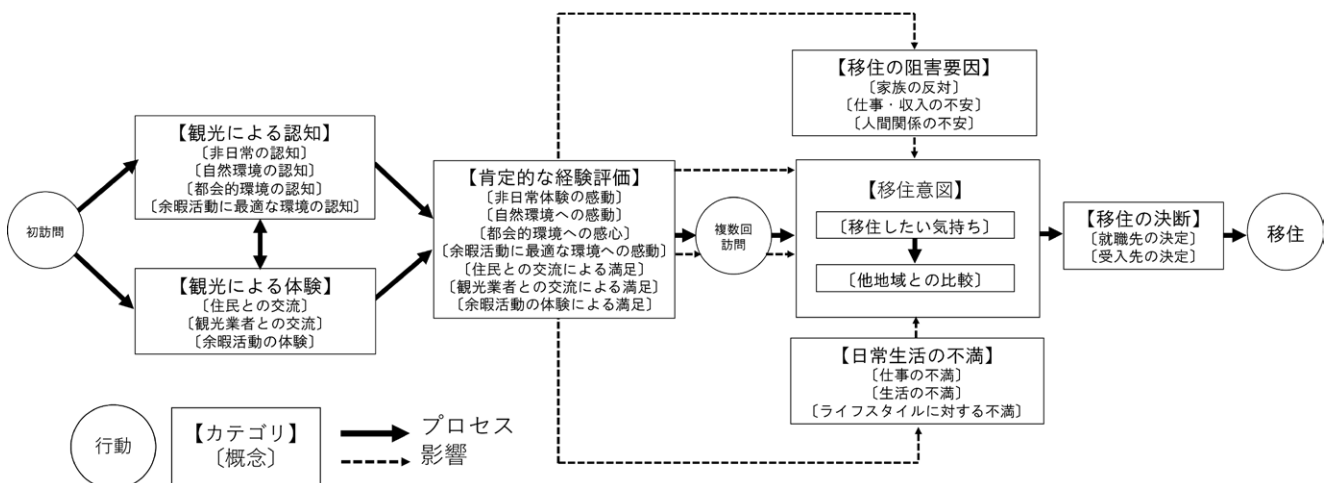
移住をしたい気持ちが芽生え、移住を実行に移そうとする段階で、阻害要因も知覚するようになる。「沖縄に移住するという話は、当初家族から猛反対を受けていて。家族を説得したりしないといけなくて。(F)」、「(移住を希望する夫に対して) そんな田舎暮らしをして、どうやってお金を稼ぐんですか。っていう話で、ずっと何年も保留にしていたんですけど。沖縄で生活するのは大変だっていうのはなんとなくわかっていました。(I)」の[Co20. 家族からの反対]という外的要因や、「お金とか結構仕事とかも不安だったんですけど。(C)」といった[Co21. 仕事や収入の不安]、「やっぱり内地って、つまり本土から大和んちゅで、ないちゃーって聞いたことがありますか。ないちゃーって、どちらかというとかバカにした言い方なんですね。あんたないちゃーねーって言われると、あんた本土から来たんでしょ。っという感じで。(I)」というように、移住後にその地になじめるのかという[Co22. 人間関係の不安]など、内的要因が、移住の阻害要因として知覚

している。

Ca7. 【移住の決断】

移住をしたい気持ちと、移住の阻害要因を知覚しながらも、移住者は移住することを決断し、移住を実行している。その決断要因として、「(決断した理由は)やっぱり仕事ですね、仕事が決まってない状態で行くのはちょっとリスクだになって。(F)」、「実際に職安に行ったら結構仕事がある。しかも大手通信会社で条件もいい。なので、その仕事が決まったので、移住しよう決めました。(A)」というように、[Co23. 就職先の決定]が移住決断の直接的な要因となっていることがわかる。また、「ギター演奏を見せるために、一度沖縄に行き、劇団の方の演奏を披露したら、思いのほか高評価をもらい、一緒にこっちで演奏しないかと言われ、移住を決意しました。(B)」や、「〇〇島に行った時に、交流した人の中に農家さんがいたんですよ。なんかその農家さんとここで働くことのできるのかなみたいなことを聞いてみて、そしてなんか別にいいよって、軽い感じで言われた。あーそういうなんか繋がりもあるんだなーって。それで決意したところも大きいですね。(H)」などのように、仕事の決定ではあるが、就職先というより、自分自身を受け入れてくれる人がいるという、[Co24. 受入先の決定]が移住決断の大きな要因となっている。

図-1 観光経験からライフスタイル移住意思決定プロセスモデル



5. 考察

5-1 観光経験からライフスタイル移住意思決定プロセスモデル

前章の調査結果に基づき、モデル化を試みる。まず、初訪問において、観光による認知と体験を通して、今回の調査対象者全員が肯定的経験評価を行っていた。このような、ポジティブな感情が、沖縄へ複数回訪問するプル要因となり、移住をしたいという願望に影響を与えている。そして、沖縄へ複数回訪問し、同時に日常生活での不満（プッシュ要因）が増幅することで、移住したい気持ちが芽生える。このような気持ちが芽生えると、他地域の情報を得つつ、沖縄と他地域を比較しており、この段階になると、移住が単なる願望ではなく、真剣に移住を実行しようとする、移住意図となる。この移住意図の段階では真剣に移住を考えているため、現実問題として、移住の阻害要因を知覚する。しかし、沖縄への肯定的経験評価によって形成された、移住のプル要因によって、阻害要因を克服しようとする努力が確認された。しかし、移住意図の段階では、移住の実行にはまだ踏み切れない。移住決断に直接的な影響を与えるのは、沖縄での就職先の決定や、受け入れてくれる住民がいることで、移住を決断し、実行する。この一連のプロセスをモデル化したのが、図-1である。

5-2 観光経験による移住意図形成

次に、図-1のモデルを用いて、観光経験が移住意思決定に影響を与えた要因についてさらに検討を行う。本研究においては、調査対象者全員が、沖縄への観光については肯定的経験評価をしており、その要因が認知と体験による感動や満足であることを明らかにした。特に「最初は海が目的で訪問していたのですが、後々には、沖縄の人たちの人間味とでもいいですか。結構地元の人たちと触れ合うことが多くて。そんな方々に会いたくて来ていた部分もありますね。(F)」という語りから、自然環境などの感動より

も、住民との交流による人間関係の形成が、ライフスタイル移住のプル要因となり、移住意思決定に影響を与えていた。すなわち、自然環境については、複数回訪問すると、徐々に感動は薄れていくと考えられるが、地元住民との人間関係は、接触回数が多くなるほどに、その関係が密になり、結果的に「徐々に住んじゃった方がいいんじゃないかと思いはじめようになりました。(F)」という移住意図につながっていると考えられる。

この移住意図を形成する要因を、リピート訪問と移住の関係という視点からも考察する。今回、調査対象者の多くが、複数回の訪問を行った結果移住を決断しており、訪問前に移住を決めている例はなかった。このことは、先行研究でも同様の指摘はあるものの（Johnston & Kawai, 2011）、訪問回数が増加すると、移住意図が形成されるという指摘はされてない。では、特定の地域へリピート訪問する理由はなんだろうか。大方優子・五十嵐正毅（2015）は旅行先へのリピーターを定量的に類型化したところファン型、変化型、習慣型、無関心型の4つに類型できるとしている。この類型でファン型は地域に対する信頼、愛着、関心などの思いが強く、地域のファンといえる存在としている。この知見から、移住意図が形成されるリピーターはファン型であると推察され、その地域への強い思いの源泉は、構築された人間関係によって形成された、地域への愛着であったり、ダイビングなどの関心が高い余暇活動であったりすると考えられる。

また、移住意図はプル要因だけでは形成されない。提示したプロセスの結果から指摘できるのは、日常生活の不満である。リピート訪問すると、先述した地域への思いが強くなり、移住したい気持ちが徐々に形成されると考えられ、この地域への思いが移住のプル要因となる。しかし、実際に移住行動を起こすには、プル要因と同時にプッシュ要因も影響を与えており、そのプッシュ要因となるのが、日常生活の不満である。さらに、そこに

複数回、その地へ訪問するという行動が加わることで、移住動機が増幅していくと考えられる。このような、プッシュとプルの相互作用による移住動機の形成については、日本人のオーストラリアへの移住における研究でも指摘されているものの（長友淳, 2013）、本研究においては、国内移住でも同様の心理構造になっていることが明らかになり、さらに複数回の訪問による経験も、移住意図に影響を与えることを示唆した。

これらのことから、観光経験による肯定的経験評価というプル要因によって、複数回訪問するファン型のリピーターとなり、日常生活における不満というプッシュ要因が加わることで、移住意図が形成されるということが考えられる。このことは複数回訪問と移住意図形成には強い正の関係があることが示唆され、さらにその間には、愛着などの、地域に対する思い入れを表す何らかの概念が存在することも推察される。

5-3 移住の阻害要因

これまで、Iターン促進のために都会の潜在的移住者に対して、国や移住支援団体が阻害要因について調査している（総務省, 2017；一般社団法人移住・交流推進機構, 2015など）。しかし移住プロセスのどの段階で、どのような阻害要因を知覚するかという調査はほとんどない。本研究では、具体的な移住の阻害要因として、仕事や収入の不安、コミュニティとの付き合いによる人間関係の不安、そして家族の反対があることを明らかにした。これら要因については、総務省などによる、潜在的移住者の調査とほぼ同様の結果がでている（総務省, 2017；一般社団法人移住・交流推進機構, 2015など）。さらに、阻害要因を知覚する段階について、移住意図の段階、すなわち移住に対しての願望から、実現へ向けて現実を意識した時であることを示した。以下では、この移住意図、阻害要因および他地域との比較について詳細に検討する。

まず、図-1のプロセスにおける、人々

は移住意図の段階において、阻害要因を知覚している。このことは、移住者は、沖縄という場所への移住を即断したわけではなく、沖縄移住の阻害要因を知覚しながら、他の地域と沖縄の比較を行い、最終的に、沖縄への移住を決断していたということである。複数回の訪問によって移住願望が芽生えたにも関わらず、他地域と沖縄を比較している。この阻害要因の知覚と他地域との比較から考えられる関係については、移住は高リスクの行動という側面から説明できる。ライフスタイル移住は自発的な移住であり、仕事などの理由による、生活のための移住とは異なり、自らの理想のライフスタイルを求める、自己実現的な移住である。そのため、必要性が高い移住ではない。しかし、いずれの移住にしても、移住そのものは、観光と比較すると時間的、経済的、社会的に高リスク行動である。そのため、ライフスタイル移住の場合、このような移住リスクを回避する最も有効な手立ては、「移住をしない」である。しかし、観光経験によって増幅された移住動機によって、移住を実行しようとするものの、リスクがあることは変わらないため、そのリスクを低減、回避するため、他地域との比較を行い、沖縄が最も良い移住地であると、自己を納得させて、決断するというプロセスが内在していると考えられる。

次に、阻害要因の克服についてである。今回の調査では、阻害要因を知覚しながらも最終的に移住を決断し、実行した人が対象となっている。しかし、その背景には移住を断念した人も多く存在するはずである。では、移住した人と断念した人の違いはなんだろうか。Hubbard and Mannel (2001) はレジャー活動について、レジャーに参加しようとする動機と、レジャー参加の阻害要因との間には、阻害要因を克服し、参加しようとする概念が存在し、その概念を“Negotiation”としている。これを中村・西村・高井 (2014) は日本語で「すり合わせ」と表現しており、Hubbard and Mannel (2001) は、す

り合わせの努力をする動機の強さは、レジャーに参加しようとする動機の強さに依拠するとしている。すなわち、この知見を援用すると、移住への動機が強くなるほど、阻害要因を克服しようとするすり合わせの努力をするということである。例えば、家族の反対が阻害要因となっている場合「家族を説得したりしないといけなくて。(F)」というような語りから、家族を説得しようとする動機の強さは、移住を実行する動機の強さに依拠するということとして考えられる。

6. まとめと今後の課題

6-1 まとめ

本研究では、過去の観光経験がライフスタイル移住意思決定へ影響を与えるという、欧米での先行研究について検討したところ、その多くが、事例研究であり、プロセスのモデル化を行った研究はほとんどないことから、モデル化を目指し研究を行った。調査方法については先行研究で用いられている、質的調査を用いたものの、分析方法は質的データからプロセスモデル化を可能にする、MGTA分析を行い、モデル化を行った。そこで、この調査分析結果を踏まえ、本研究の成果について4つ述べる。まず1つ目に、繰り返しになるが、観光から移住へのプロセスのモデル化を行ったことである。分析方法として、これまで観光研究や移住研究ではほとんど用いられていない、MGTA分析を用い、質的データを概念やカテゴリーとしてまとめ、それらの関係を検討し、プロセスモデルとして提示することができた。2つめに、複数回訪問と移住意図に正の関係が推察された。これまで、リピーターなどの観光行動研究とライフスタイル移住研究は個別の研究領域として認識されがちであり、特に国内における研究では、発表されている論文の傾向から、このような認識が顕著である。しかし、本研究では移住意図という概念を用いて、リピーター訪問という観光行動が移住に結びつくという新たな可能性の提示を行った。3つめに、阻害

要因の知覚プロセスを明らかにした。移住願望が芽生え始めた段階で、阻害要因を知覚し、他地域との比較を行う。これまでの研究では、この他地域との比較という要因は明らかになっていなかった。そして4つめに、移住の阻害要因を克服しようとする行動が確認された。レジャー参加の阻害要因研究の知見を援用すると、移住をした人は、阻害要因を克服しようとする努力をしており、それは、すり合わせという概念で表されうる。そして、そのすり合わせの努力をする動機の強さは、移住動機の強さに依拠されうることを示唆した。このことは、移住した人と移住を断念した人の違いを、明確にできる可能性があることを意味する。

6-2 今後の課題

今後の課題も残されている。今回の調査対象者は、ほとんどが単身者²で、移住に対して家族を理由とする抵抗感が少なかった。調査対象者の多くが独身者となったのは、スノーボールサンプリングを用いたことによるサンプル抽出上の問題なのか、またはライフスタイル移住者において独身者が占める割合が高いのか、本調査では判断ができなかった。また、MGTA分析によってプロセスモデル化を行ったが、サンプルの問題と同時に、沖縄県だけの事例であるために、注意する必要がある。MGTA分析は限定された範囲内における説明力にすぐれた理論(木下康仁, 2007)としており、今回は沖縄へ自発的に移住した観光経験の有する移住者という限定された範囲内でのプロセスともいえる。そのため、このような条件によって作られたプロセスモデルであるために、今後は沖縄以外の地域によって定量的に検証を行い、モデルの妥当性を検討していく必要がある。最後に、ライフスタイル移住者の多くが、沖縄へリピーター訪問を行っているという状況から、リピーター訪問研究についても検討を重ねる必要がある。例えば、観光者が同じ観光地へリピーター訪問する要因として、岡野雄気・倉田陽平・直井岳人 (2018)

は観光地への愛着という概念を用いて、滞在中の経験に焦点をあて報告を行っている。すなわち、滞在中の経験によって、観光地に愛着を形成し、リピート訪問を促進するということである。本研究においても、観光経験の後に肯定的経験評価という概念を提示したものの、これらがなぜ形成され、再訪問を促進したのかについて、移住プロセスの側面からも明らかにしていく必要がある。また逆に、1度の訪問だけで移住を決断している移住者も存在した。その理由として、1度の訪問で、強い肯定的経験評価を行い、移住意図を形成するパターンや、沖縄へ訪問前から、移住を意識しており、実際に訪問して移住を決断するといったパターンがあった。これらパターンは、複数回訪問というプロセスだけ当てはまらなかったため、厳密にはプロセスモデル通りとは言えない。しかし、1度の訪問で移住を決断することが、特殊なパターンなのか、それとも一般的なパターンなのかについて、今回の調査だけでは判断ができない。そのため、今回は特殊なパターンとしてモデルに組み込むことはしなかった。今後は定量的な調査を踏まえ、モデルの修正を行うか否かについて、検討課題とする。

注

- ⁽¹⁾本稿ではこれ以降、単に「移住」「移住者」と表記している場合は、「ライフスタイル移住」や「ライフスタイル移住者」のことを指す。
- ⁽²⁾表-1の調査対象者C、I、Kが夫婦での移住、他は単身での移住である。

引用文献

- ・一般者社団法人移住・交流推進機構『移住に際して気になること』2015年
最終閲覧日2018年11月18日
<https://www.iju-join.jp/material/files/group/1/report4.pdf>
- ・伊東宏修、前田和司「リゾート地にお

- ける移住者に関する実証的研究：北海道ニセコエリアのアウトドア体験業者を中心に」北海道教育大学『北海道教育大学紀要人文科学・社会科学編』54（1）、2003年、141-153頁。
- ・大方優子、五十嵐正毅「旅行先へのリピーターの行動特性に関する研究：リピーターの類型化」九州産業大学産業経営研究所『産業経営研究所報』47、2015年、15-25頁。
- ・岡野雄気、倉田陽平、直井岳人「観光地への愛着に影響を与える滞在中の経験」日本観光研究学会『観光研究』30（1）、2018年、5-18頁。
- ・沖縄振興開発金融公庫企画調査部『沖縄県への移住意向に関する調査』2017年
最終閲覧日2018年11月18日
https://www.okinawakouko.go.jp/userfiles/files/autoupload/20170324_02.pdf
- ・小田切徳美 筒井一伸編著『田園回帰の過去・現在・未来 移住者と創る新しい農山村』農山漁村文化協会、2016年
- ・木下康仁『グラウンデッド・セオリー・アプローチ：質的実証研究の再生』弘文堂、1991年
- ・木下康仁「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）の分析技法」富山大学看護学会『富山大学看護学会誌』6（2）、2007年、1-10頁。
- ・島村麻里「アジアへ向かう女たち—日本からの観光（特集 現代日本をめぐる国際移動）—（ニッポンを出る人々）」勉誠出版『アジア遊学』104、2007年、92-99頁。
- ・須藤直子「新しい「移住」のかたち—1990年代以降の沖縄への移住を事例として」早稲田大学大学院文学研究科『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第1分冊56、2010年、63-80頁。
- ・須藤直子「「沖縄移住」再考：観光客はいかにして「移住者」になるのか（特集「占領の継続」を問う：講和、復帰、基地）」早稲田大学琉球・沖縄研究所

- 『琉球・沖縄研究』4、2013年、138-161頁。
- ・総務省地域力創造グループ過疎対策室『「田園回帰」に関する調査研究報告書』2018年 a 最終閲覧日2018年11月20日
http://www.soumu.go.jp/main_content/000538258.pdf
- ・総務省地域力創造グループ自立応援課『これからの移住・交流施策のあり方に関する検討会報告書—「関係人口」の創出に向けて』2018年 b 最終閲覧日2018年11月20日
http://www.soumu.go.jp/main_content/000529409.pdf
- ・長友淳『日本社会を「逃れる」：オーストラリアへのライフスタイル移住』彩流社、2013年
- ・西村幸子、高井典子、中村哲「海外旅行の実施頻度に関する動態的循環モデル：若者の海外旅行離れ「論」への試み」同志社大学商学会『同志社商学』65（4）、2014年、337-363頁。
- ・Bell, M., & Ward, G., "Comparing temporary mobility with permanent migration", *Tourism Geographies*, Vol.2 (1). 2000. pp.87-107.
- ・Benson, M., A desire for difference: British lifestyle migration to southwest France. In M. Benson & K. O'Reilly (Eds.), *Lifestyle migration: Expectations, aspirations and experiences*, Aldershot, 2009, pp.121-136.
- ・Bowen, D., & Schouten, A. F., "Tourist Satisfaction and Beyond: Tourist Migrants in Mallorca", *International Journal of Tourism Research*, Vol.10 (2). 2008. pp.141-153.
- ・Cuba, L., "Models of migration decision making reexamined: The destination search of older migrants to Cape Cod", *The Gerontologist*, Vol.31 (2). 1991. pp.204-209.
- ・Hubbard, J., & Mannell, R. C., "Testing competing models of the leisure constraint negotiation process in a corporate employee recreation setting", *Leisure sciences*, Vol.23 (3). 2001.

pp.145-163.

- ・ Johnston, C., & Kawai, J., "Why Did I Come Here?: Migration Motives of Raifusutairu Ijusha Living in Auckland New Zealand", The Journal of The Japan Society for New Zealand Studies, Vol.18. 2011. pp.5-19.
- ・ King, R., Warnes, A. M., & Williams, A. M., "International retirement migration in Europe", International journal of population geography, Vol4 (2). 1998. pp.91-111.
- ・ Page, S. J., & Hall, C. M., The geography of tourism and recreation: Environment, place and space, London, 1999
- ・ Rodriguez, V., "Tourism as a recruiting post for retirement migration", Tourism geographies, 3 (1). 2001. pp.52-63.
- ・ Truly, D., "International retirement migration and tourism along the Lake Chapala Riviera: developing a matrix of retirement migration behavior" Tourism Geographies, Vol4 (3). 2002. pp.261-281.

【本論文は所定の査読制度による審査を経たものである。】